

令和4年度鳥取県文化芸術振興審議会 議事録

[日 時] 令和5年3月16日(木)10:00~12:00

[場 所] 倉吉体育文化会館 2階 小研修室1

[出席者] **委員** 木谷委員(会長)、藤井委員、川井田委員、関本委員、植田委員、福井委員、木村委員、ひやま委員 (欠席:山下委員、入澤委員)

事務局 地域づくり推進部 村上文化振興監、
文化政策課 井崎課長補佐、富田課長補佐、毎野課長補佐

I 開会

○コロナのほうはマスクも無くなり、5月には5類に変わり日常がだんだん戻り、文化の催事も元に戻ってくると思う。だからこそ、この3年間の影響が徐々に表面化してくると思う。昨年度はアートピアとっとり行動指針の中間評価を行っていただいたところだが、今日の会議では、来年度が最終年度となる行動指針の改訂にあたり、新たに入れなといけない視点について皆さんから意見を伺いたい。

II 報告 令和5年度当初予算 文化政策課所管事業について

◇本編資料p1「令和5年度当初予算文化政策課所管事業」に沿って、事務局各事業担当補佐から事業について説明。

⇒質問等は無し

III 議題 「アートピアとっとり行動指針」の改訂について

◇本編資料 p 2～3、資料 1～4 に沿って、事務局富田から概要を説明。

◇資料 4 の資料⑥については、美術館整備局の梅田局長が説明。

<美術館整備局の説明終了後、県立美術館関連の質疑応答>

○作家としてギャラリーとして芸術祭をする身として、鳥取県で活動していると思うことの一つが、教育の場では美術やアートに触れる機会が少ないのが非常に残念ということ。教職員の方の負担軽減とか、みんなで豊かになるという視点も大事だとは思う。今回、アート・ラーニング・ラボを美術館が担われることにすごく期待しているが、その中身はどのようなものか。

⇒(美術館整備局)

・学校現場において、美術の授業というのが、手を動かすという「創作」というところと「鑑賞」という2つのテーマの比重が今までどうかというご意見を多く聞くところ。「創作」も当然大事だが、「鑑賞」というのは目を鍛える、もしくは感受性を高めるという機会というのが大事だと思っている。そういう機会を皆さんに、今まで以上に提供できると思う。アート・ラーニング・ラボで子ども達を招待し鑑賞してもらい、そして今後、先生と連携して取り組む機会を設けるということは当然だが、一方で、美術館で子ども達が発見したり、創作したりということもしっかり力をいれていきたい。

・ブリロの箱の購入が県内外で大きく話題となったことを受けて、学校現場で、観る方の美術について充分教えていなかった、いわゆるピカソのあたりまでしか教えてなかった、その後の現代美術について

教える機会がなかったということ等を反省され、その先の授業をやっているという話も耳にするようになってきた。そういったところで学校現場と連携しながらと思っている。

○障がいのある子ども達にとって、創作、表現することがコミュニケーションになるので、ぜひいろんなワークショップをアート・ラーニング・ラボの中で展開してほしい。

⇒(美術館整備局)

・「鑑賞」だけではなく、「表現」など、さまざまなプログラムを作っていこうと思っている。すでに県内の特別支援学校と一緒にワークショップをやってみたいことはあるので、ぜひ充実させていきたい。

○金沢市の 21 世紀美術館がオープンした時、小学4年生の子ども達をバスで招待した取組みを知っているが、パンフレットの中に、「もう一回券」というのを付けていた。子ども達が初めて美術館に行って、そこで「面白い！もう一回行きたい」と思った時に「もう一回券」を使って、保護者と一緒に行く。大人も子どもに連れられて初めて来るという作戦というか、来場者を増やす取組みを何か考えてもらえたらよい。

⇒(美術館整備局)

・「もう一回券」のアイデアですが、非常に良い考え。実は県立博物館の方でやっている鑑賞に来た子ども達には、そのアイデアを使っており、この券を使ったら家族の人に来てもらえるというのを配っていて、若干使ってもらっている。親御さんと一緒にやって来た子ども達が、そこで学んだ対話型鑑賞を自分がファシリテータになって親御さんにやっているという場面があった。親と子どもが同じ目線で美術に向かうと言う場面が実際に起きているので、ぜひこれをもっと広めてしっかり続けていきたい。

○もっと子ども達に訴えかけるような、映像、音楽、ダンス、歌というのを活用した PR をしていくのも、一つの手段だと思う。

○アート・ラーニング・ラボの中で、小学校、中学校のものがどういうふうに動いていくのかは見えるが、高校・大学のところのラーニングがなかなか見えない。例えば2泊3日ぐらいの芸術セミナー、それなりの先生と会わせながらできないか。倉吉博物館では、前田寛治と菅楯彦の大賞があり、その中でたくさんの素晴らしい絵がある。例えば、何か自作を語るというようなセミナーができれば、芸術を志す学生あるいは高校生を寄せて、何か作ってもらうことができれば一番いい。また、地元で洋画、日本画を書く人も参加できるセミナーを用意できないか。

⇒(美術館整備局)

・県ゆかりの方に留まらず、県内外、国内外、いろんなアーティストとの触れ合いが実現することを方向性として持っているので参考にさせていただきたい。高校生には、美術部の生徒と一緒に何かやりたいというつもりで、実は美術館ができるまでのサテライトスタジオとして、倉吉東高のそばに借り家をして HATUGA (はつが) スタジオというものを設けた。アーティストが直接話をするトークショーなどをしており、そういったところに高校生に来ていただくといいと思っている。

○80代、90代の人から「アンディーウォーホール」「ブリロの箱」なんて言葉が出てくれば、すごい認知度だと思うが、「何を言っているのかよくわからないけど、あの3億の・・・」とかの話になる。だから、それが来たと

ころで何もありがたみを感じない。バックボーンや現代アートの時代背景などを美術館とかホームページとか文化ホールに掲示し、県内で同時に認知を図ることも大事。また、小学4年生が観終わったあと、例えば、白い箱を配って、自分の箱を作るというのがあれば思い出にはなるかと思う。

⇒(美術館整備局)

・せっかくこういう関心が高まっている時に、もう少し発信したいと考えているところ。理解をするというのはなかなか難しいもの。ただ、あれは何だという考えるスイッチが入るのは間違いない。せっかくスイッチが入った人たちを冷めさせることなく開館まで持って行きたい。小学校 4 年生の箱を使ったというのは、非常に良いアイデア。「ブリロの箱」を理解していただくためには、親しんでもらうということも大事だと思っている。

<事務局からの資料説明終了後、行動指針に入れる新たな視点等について意見交換>

○コロナ前の状況に戻して行くとともに、コロナ禍によって多様化したツールの支援というようなことも課題に入れたら良い。

○ジュニア県展などは唯一関心が高くなっていて、子どもの書道、絵画、写真で結構頑張っている子がいる。しかし、それは中学生までであり、高校の時の発表とか展示は空いてしまい、エスカレーターみたいな形になっていない。美術とか興味持った子をそのままずっと伸ばしていくというシステムにしていけないといけな。高校は授業が全く無いとか発表する場もないような状況なので、そういったところも検討してほしい。

○学校の部活動、地域クラブ活動の在り方に関するガイドラインについて、教育委員会の管轄かもしれないが、スポーツの方では動きが早いように思うが、文化部に関わるのが非常に動きが遅い。スポーツに比べるとネットワークというのがなくて、遅れているように思う。これから 5 年の間にますます具体化していくと思うので、文化芸術の発信、地域のネットワークの構築というのが大事になってくる。

○第1次行動指針の 5 年間で達成しなかったことの一つに県内の団体のネットワークづくり等があり、それに取り組もうとしているという事務局の説明があったが、文化芸術活動の任意団体が、クリエイティブプラットフォーム構築事業というものを 2022 年度から着手しているが、ここと連携するのか、県独自でネットワークや場を作っていくのかを聞きたい。

⇒(事務局)

・他県でも、そのような支援体制をアートセンターやアーツカウンシルというような名称で進めているが、実は地域によって内容は異なっている。それをやるためには、他県も何年間も状況調査、検討された上での体制づくりをされているところ。今からどういう形のものを作っていくのかを調査したり、分析したり、何が必要かを考えた上で体制を作っていくということなので、具体的な形は、これからになる。ただ、おっしゃっている組織とは別の観点で、県で勉強して検討していこうと考えている。

○民芸は鳥取県の強さであるし、おじいちゃんおばあちゃんの芸術まではいかない「趣味の世界」も大事にしていきたいと感じている。また、何か絵画を飾るなど、家庭の中での文化芸術の推進という観点は、

今まではなかったと思うので、そうした動きも底力としては大事だと思う。

○手芸だとかは、これまでアートとして扱ってもらえてないが、そういう世界まで広げていけると、もっと文化芸術の層が厚くなるのではないと思う。今、サブカルチャーがかなり注目されているが、カルチャーセンターの中のものからでもサブカルを増やせると思う。

○行動指針は、文化芸術により本当に心豊かに過ごせられる県民を作りたいという指針なので、委員から意見の出ているカルチャーだとかサブカルだとか、いろんな形の捉え方で良いと思う。そこらへんを、コロナからの回復というところに、幅広に行動指針という形の中で緩やかに提示してもいいのではないと思う。

○「コロナから回復」という場合は、県民の方々に視点を向けて底上げをするような、丁寧な活動が大事と思う一方で、そう言いつつ、「文化観光を推進する」となると、外からどれだけの人来てもらおうかということで、何か魅力あるものを頑張って作らないといけないという身の丈に合わないものになってしまう気がする。美術館ができるから、文化観光に力を入れて経済的な回復を狙いたいというのは、すごくよくわかるが、次の5年間でこの両方は、とても難しいのではないと思う。

IV その他

⇒意見なし

V 閉会

今回いただいたご意見については、事務局で整理し次年度の行動指針改訂の審議へと繋げていきたい。